

詩作 「正と負の巡礼」

資料作成者：叶目 メイ 第二幕

惨めな記憶を思い出すもの

温かい優しさを思い出すもの

第一幕

鼻につくのは青々とした脂の香り

目につくのは数々の食器

ふとひとつの店の前で立ち止まる

暗い洞窟

群がる数多の獣は何も考えない

店主から手渡される椀

暗い表情

どれだけ消費しても減ることはない

満ちる黄金の液体

道ゆく人の表情は虚ろ

ふと歩いてきた道に目を落とす

彼はそこを通り過ぎる

淡い光を頼りに歩を進め

踏み締めた床は柔らかい

行き交う人に肩が触れる

湯気のたつ温野菜

また先は長い

振り返れば絶望の表情

焼き目のついた魚

甘いアイスクリーム

第三幕

誰も自分を信じない

道端に花が咲いている

誰も相手を信じない

並び立つ屋台を覗く

道沿いに数々の花が咲いていた

この世に存在するのは自分以外

子供の頃を思い出す懐かしいもの

あか、だいたい、むらさき、きいろ、ピンク

どれも暗闇の中で輝いて見える

肉厚の花弁は道ゆく者の目を惹く

ひとり、またひとりとそれを摘み取る

浮かべているのは下卑た嗤い

あるものは花の匂いを吸う

別のものは花を味わうように舐める

それを食べるものもいる

この光景に耐えられなかった彼は歩みを進める

フードの奥から覗く瞳は一様に赤黒い

風が短い草を撫でる

広い野原に続く一本の土の道

さわやかな風も曇り空の下

常にひんやりとした湿気が身を包む

視線を感じて振り向く

そこには誰もいない

また別の視線を感じる

しかしそこにもいない

見られる感覚が彼の皮膚を

脳を鋭く刺す

視線が全身にまとわりつく

彼は足早に道を辿る

#### 第五幕

空を見上げると闇が渦巻いていた

ここでは光すらも飲み込まれてしまらしい

あらゆるものを飲み込むあの空はだれか

底無しの欲

全てを自らのものにする

それを発しているのは独りのものか

はたまた人々の願いか

#### 第四幕

黒い衣が目の前を横切る

道ゆく人は一様に黒い

一寸先の暗闇に足を踏み出す時

目の前の景色を頭上に吸い込まれていることに気付く

その先を見たいと望むことは欲なのか

彼は自問しながら歩みを進める

何人にも聞いたが誰もが違う答えを示した

そして誰もが他人が間違っていると云った

誰も自分が一番物事を知っているのだと

彼は諦めて自分の勘を頼ることにした

悲鳴でもなく

涙を流すでもなく

誰もが互いに眉を釣り上げる

紅い背景に溶け込むように

誰もが全身を赤く染め

声がこだまする

## 第六幕

人々の表情は明るい

何かに侵されたような跡もない

誰も彼もが自信に満ち溢れる

しかし彼らはいつも独りだ

友と雑談を交わすことも

恋人と愛を囁くこともない

彼らのうちのひとりに道を聞いてみた

## 第七幕

あちこちで燃え盛る炎

焚き火のような小さいものから

大木が一本燃えているようなものまで

炎は空を赤く染める

煙は空を白く染める

誰もが声の限り叫ぶ

## 第八幕

灰色の空

灰色のコンクリート

色のない雰囲気

人々は仰向けで空を眺めている

どの表情も何も浮かんでいない

視線も定まっていない

汝の罪は汝の全て

汝の罪が消えるとき

汝の生は改められる

人はそこにいる

開け、純白の門を

しかし道沿いの街はどこも死んでいた

歩め、無垢の庭を

人々が活動しなければそこは死んでいるのだ

全てはそこで報われる

彼は死んだような人々を眺めていた

## 幕引き

自らの罪を自覚せよ

自らの罪を悔い改めよ

自らの罪を洗い清めよ

自らが罪と引き離されたことを感じよ